# 一色

四谷イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一色

【Ｎコード】
Ｎ２８６３Ｉ

【作者名】
四谷イツキ

【あらすじ】
毎年夏になると、別荘のあるこの町にやってくる玲紀。
年に一回だけの“僕”の楽しみであった。
だが、小学生最後の今年は玲紀の様子がいつもと違って・・・。

## 1（前書き）

夏の夜空の雰囲気を、
純粋で一人の友達を大切に出来る子供らしさを、
表現したかった作品です。
全体的に透き通ったイメージで書きたかった作品です。
そんな稚拙な作品ですが、よろしくお願いします。

# 1

夜は嫌いだ。

彼が言う。
僕は彼の顔を覗こうとして、止めた。
覗いてはいけないような気がしたからだ。

どうして？

僕は返した。
真っ直ぐ空を仰ぎ見ながら、隣にいる彼の言葉を待つ。
涼しい風が頬を撫でるようにして吹き、彼方へと消えていった。

お前が横にいると、淋しくなる。

ポツリと、彼は弱々しく答えた。

声が、震えていた。

## 2

夏の空は冬よりも星が騒いでいるように見える。
冬の空のほうが、空気が澄んでいて数倍も綺麗に輝くのだが、
夏の星はそんな差を感じさせないほどに瞬いている。
草の匂いが鼻腔をついて、夏の湿った空気と共にまとわりつく。
どこまで逃げても追ってくる匂い。
僕はこの感じが、少しだけ好きで、そして少しだけ嫌いだった。

この匂いを感じ取れる頃には、彼が隣にいるから。

「今度はいつ帰るの？」
僕が寝っ転がった草原の上で訪ねた。
玲紀は頭の下に両腕を回して、僕を横目で見る。
「明々後日だよ」
「・・・そう」
僕は素っ気無い返事を返すと、玲紀と同じようにして星を眺めた。
別に星なんて今見なくても、僕はいつだって見れる。
でも玲紀にとってはこんな満天の星空、一年に一度しか見れないのだ。
背が高く光るビルなんてない、空の視界を阻む物なんてない世界。
それが、僕の住む世界だ。
「玲紀の住むマチは、星が見える？」
きっと、もう何度も聞いた質問だろう。
彼がここにやって来る度に聞いてしまう。
「見えない。こんなに沢山の星はないよ」
玲紀はちょっとした金持ちの子供らしく、僕の住むこの町に別荘を

持っている。
毎年、夏になるとやって来てはすぐに帰っていくのだ。
「来年は中学校だね・・・中学生になっても来れるの？」
玲紀は急に起き上がると、背中についた草を掃いながら立ち上がった。
僕もつられてゆっくりと体を置きあげ、立ち上がった玲紀を見た。
僕の視界にいっぱいだった星が、玲紀の細長い体で隠される。
「もちろん。俺の友達は、お前だけなんだ」
そう言うと、玲紀は大きな瞳を細めながら笑った。
言葉の意味はよく理解できずにいたが、ぎこちなく僕も微笑む。
ただ、彼のその笑みはいつになく静かだった。

「なぁ、去年のあの場所、行ってみようぜ」
玲紀は僕の腕を掴んで催促する。
あの場所とは、去年玲紀が来たときに発見した林の中の場所である。
小高い丘の上にあり、僕達のように好奇心旺盛でないと見つけることができないかもしれない。
生まれてからずっとここに住んでいる僕でさえ、去年初めて見つけた場所だったのだ。
「まだあのままかなぁ？」
小走りに向いながら、僕が呟いた。
忘れていたわけではないが、去年から訪れてはいなかった。
どこかで、玲紀と一緒の時じゃないと行ってはいけないような気がしていた。
「さぁ、どうだろうな」
玲紀の整った顔立ちがくしゃっと歪む。
彼の大きな口が歪むと、僕まで嬉しくなる。

一度、昼間に彼に会ったことがあった。
当然、僕も玲紀も知らないフリをする。
玲紀の母親は冷徹な性格らしく、玲紀の家柄と同等かそれ以上の家の子供でないと交際を許さないらしい。
僕には到底分からない家訓なのだが、僕の家で言う『知らない人についていかない』というのと同じことだと思っていた。
しかし、昼間に見かけた玲紀の笑顔は、星のない空のようで、僕は思わず目を背けた。
人形のように整った顔が、テレビの中のアイドルのように精巧な笑顔を映し出しているだけだった。

だから真っ暗な空に星の灯ったような、『玲紀』の笑顔を傍で見ると安心する。
あんな玲紀は人間じゃない。僕の知っている玲紀ではない。
ガサガサと一年の間に伸び繁った草や枝を掻き分けて、林の中に入りこむ。
二人に会話はなくとも、二人は同じことに必死で、同じことを思っている。
それだけで僕は満足だった。
「あ・・・」
前を掻き分けていた玲紀が声を漏らす。
僕が彼に続いてひらけた空き地に出ると、思わず息を呑んだ。
「そっか、母さんが言ってた・・・この辺に高層住宅が出来るって・・・」
すっかり肩を落とした玲紀は、いつもは僕よりも背が高いのに、今ばかりは小さく見える。
背中を見ただけで、どう声を掛けたらいいのか分からなくなる。
「一年の間に、変わっちゃうんだな」
淋しげにこぼした声が、夏の湿った匂いに吹かれて消えていった。

一年前、少し隆起したこの場所からは後ろに木々の掠れる音と満天の星空、それだけしかなかった。
しかし今は、その眼下に建設途中の無残な鉄鋼が組まれていた。
寝転んでも、空だけを仰いでも、その人工物は視界に入り込んでくる。
「・・・陸斗、お前は変わるなよ」
「え？」
振り返って真剣な表情をする玲紀がそこにいた。
「・・・僕は変わらないよ」
頭の中で何を言えばいいのか考えながら、ふと口をついた言葉だった。
玲紀は少しはにかんでから頷くと、小さな声で呟いてから、林の中に消えていった。

また明日、僕達はここへ来るだろうか。
人工物が影を潜める場所へ、星を見上げに来るだろうか。

二人で通った道筋だけ、伸びきった雑草が倒れている。
その道を戻りながら、僕の頭の中を玲紀の言葉がくるくると巡っていた。
明日の夜になったら、今日の不可思議だった彼の言葉について聞こう。

ありがとう、ごめんな、の真意を。

## 3

どちらが決めたのかは分からない。
暗闇が空を覆う頃、この場所で落ち合うことになっている。
具体的な時間は決まっていないし、場所だってやたら曖昧である。
遠くに川の流れる、草の生い茂った空き地の真ん中。
それが、僕達の待ち合わせ場所だった。

「玲紀、花火持ってきたよ」
昨日のように寝転がり、天井を仰ぐようにして星空を眺める玲紀に近寄りながら言った。
彼はムクリと体を起こし、僕を見つけると柔らかい笑顔を見せた。
暗くて細部までは分からないものの、それが彼の母親に向けられた笑顔とは別物だということは分かる。
「花火かぁ・・・いつぶりかな」
近所のスーパーのレジ袋に無造作に入れられた手持ち花火。
玲紀に見せるのを少し恥かしく思いながら、おずおずと差し出した。
姉が先日やっていたものの余り物だが、しけってはいないだろう。
「一昨年、一緒にやったじゃん」
僕は軽く彼の肩を叩いて、忘れたの？と冗談半分に放った。
「いや・・・忘れてないよ」
頷きながら微笑み、僕は袋の中からロウソクを取り出して点火にかかった。
適当な大きさの石の上に蝋を落し、その上にロウソクを立てる。
暗闇だった川原に、ぽうと優しい色の明かりが灯った。
「忘れるもんか」
呟くようにして玲紀が吐き捨てる。
既にその話を忘れていたため、少し間があってから玲紀を見つめた。

「・・・玲紀」
「さ、早くやろう。蝋が溶けちゃう」
彼は袋から適当に花火を取り出すと、そのうちの一本を僕に向けた。
多少の違和感を覚えながらも花火を受け取り、ロウソクの火にこよりを近づける。
反対側からも玲紀のこよりが近づき、それは同時に火花を散らした。
途端、二人して飛び跳ねて距離を置く。
玲紀の顔が花火の色に染まって見える。
「俺のは赤だ。お前のは・・・」
少しはしゃいだ声で玲紀が言う。
「僕のは当たりだね、色が変わるもん」
大きな口を半月にして笑う彼が、どこか淋しく見えた。

花火も残り線香花火だけとなった時、急に大きな風が吹いた。
「あっ」
僕が声を上げるよりも早く、ロウソクに灯っていた火は掻き消された。
小さくなったロウソクが、周りに自分の溶けた蝋でドレスのようなものを作り出している。
「ライター、貸して」
玲紀にライターを渡すと、彼は何度か擦った挙句、また僕に突き返した。
「・・・玲紀、ライター使ったことないの？」
僕が彼の黒目がちの目を見つめて言う。
「母さんが、使うなって言うから・・・家にもなかなかないし」
不思議だった。家にライターがないなんて、僕の常識では有り得ないことだった。
僕の家は両親ともヘビースモーカーだからかもしれないが・・・。
「そっか、じゃあ練習しなよ」

笑みでもって、ライターを玲紀に向ける。
練習、などと呼ぶべきものではないが、一度覚えてしまったら嫌でも点けられるはずだ。
「・・・うん」
玲紀は左手にライターを持ち、親指を添えた。
「あれ？玲紀って左利きなの？」
「そうだよ、今まで気付かなかった？」
素直に頷くと、なぜか心の奥で痛みを覚えた。
僕はもう何年も前から玲紀を知っているはずなのに、知らないことのほうが多いのだ。
彼の親指がヤスリをゆっくりと回す。
「違う違う、もっと早く回すんだよ」
僕が指摘すると、彼は言われたとおりに速度を上げて発火石を削った。
「あっ、点いた！」
彼は嬉しそうな表情を見せながら、僕に見て見て、と催促をする。
一部始終見てるのだが、それでも足りないのだろうか。
「これで一つ、賢くなったね」
微笑みながら言う。すっかり線香花火のことなど忘れていた。

またしても二人で寝転がり、空を見上げた。
時折吹く風は、湿った空気を一瞬だけ冷やしてくれるようで心地が良かった。
「・・・ねぇ、玲紀」
「うん？」
「昨日、なんで謝ったの」
僕は視界の中で小さな星を線で結びながら訪ねた。
何気ない、本当にただの疑問だった。
しかし玲紀は僕の方に背を向けて、黙ってしまった。

「昨日の玲紀・・・なんか変だったよ」
少しの間、彼が僕に背を向けていることに気付かなかったため、そのまま会話を続けてしまっていた。
視界の中では、星で描いたブドウが完成していた。
「・・・どうしたの？」
僕が上半身を起こして、玲紀の顔を覗こうとする。
すると彼は急に立ち上がり、その腰で僕の顎を跳ね除けた。
「いったぁ・・・何すんだよ玲紀！！」
感情に任せて怒鳴りつけると、彼は僕とは裏腹に冷めた声で風にもまれながら呟いた。

「お前には分かんないよ」

玲紀は追い風を受けるようにして、そそくさと歩き出す。
「ちょっ・・・玲紀！言ってくれなきゃ分かんないだろ！」
僕が必死に花火をかき集めて袋に入れ、彼を追いかけようとした頃には、既に気配すらなかった。
眉間に皺を寄せ、一抹の怒りを覚えながら袋から飛び出した花火を入れなおす。
僕の言葉の、何がいけなかったのだろう。

一人、帰路に着く。
歩くたびに視界が揺れて、光が上下に余韻を残しながら移動する。

星が泣いているように見えた。

## 4

「・・・来ない」
例の如く、星空を見上げて玲紀を待つ。
横には昨日の花火で使った石が、まだ蝋を残してそこにあった。
でも、玲紀は来ない。

僕がここに到着してから、既に一時間くらいは経っただろうか。
いつもと同じ頃に家を出て、特に急いできた訳ではない。
やはり、昨日のことが原因なのだろう。
僕は何もしていないつもりなのに、玲紀が一方的に機嫌を悪くして帰ってしまった。
彼が言うには、ここに滞在するのは今日で終わり。
明日には星すら見えないマチに帰るのだ。

僕は意を決して立ち上がると、大きく伸びをした。
空に伸ばした掌が視界を塞ぎ、指の間から少しの星が垣間見える。
大きく息を吸い込んでから、玲紀の家へと向かって歩き出した。
ただ友達の家へ行くだけなのに、妙に緊張している僕がいる。
いつか見た玲紀の母親のせいだろう。
あんなに厳格な女の人は見たことがなかった。
僕の住む町にはあんな表情をする人なんていやしない。
みんな、僕と一緒にいる時の玲紀のような笑顔をしている。
それが普通なのだと思っていた。

玲紀の別荘はここからそう離れていない。
毎晩抜け出してきていた玲紀にとって、この待ち合わせ場所はちょうど良い距離だったろう。

広い道路を僕の影だけが歩いていた。
弱々しい街灯が照らしているだけで殺風景な道だが、特に目立った事故もない。
ただ、今の僕は鬼退治へ行く桃太郎になった気分だ。
鬼の住む島へ続く道程。
母親に見つからずに玲紀に会えればいいのだが、玲紀がどの部屋にいるのかは見当もつかない。
せめて一階にいてくれればいいのだが、二階にいたら僕には手も足も出ない。
弱々しかった電灯が姿を消し、その代わりに明るすぎるほどの玄関灯が目に入る。
白い壁で仕切られ、大きな門の横にほんの小さなインターホンがついているだけであった。
この時間、さすがにインターホンを鳴らすだけの勇気は持ち合わせていない。
そっと門に足を掛けて、ひょいとその中へ飛びこむ。
家を回るようにして庭があるため、一階の様子は窺えるようだ。
罪悪感と一抹の恐怖感で、無意識の内に腰をかがめて窓の中をさぐる。
光の漏れた窓を恐る恐る覗くと、ソファに腰掛けてタバコをふかす玲紀の母親の姿があった。
「やばっ！」
すぐに窓の下に隠れるようにして身をかがめるが、既に遅かった。
頭上で素早く窓が開く音がすると、甲高い声が僕を捕えた。
「あなた、そこで何してるの！」
彼女を見ないようにしながら後ずさりすると、更に高い声で僕を呼び止めた。
「待ちなさい！どこの子供！？」
遂に僕の心の中で恐怖心が勝利を上げ、門に向って走り出した。
「母さん！！」

聞き覚えのある声が窓の中から聞こえる。
玲紀だ。

「まだ起きてたの玲紀、何？早く寝なさい」
彼女は玲紀に振り返ると、感情のこもらない声でそう言い放った。
「・・・彼は僕の友達です」
玲紀が、聞きなれない丁寧語を話していた。
驚きよりも可笑しさよりも、悲しさの類が込み上げてくる。
僕の前ではもっと優しい言葉で話すのに。
「あなた、まだそんな子と付き合っているの？」
「友達くらい自分で選びます！・・・母さんは何も分かってない」
細目で覗いた窓の向こうで、玲紀は鋭い眼孔を母親に向けていた。
「ちょっと玲紀！」
母親に文句を言う間髪を与えず、玲紀は部屋から消えて、すぐに玄関から飛び出してきた。
「行こう、陸斗！」
彼は清々しいほどの笑顔を向け、僕の右手を掴んで門を潜り抜ける。
弱々しい街灯をいくつも通り過ぎて、さっきまで僕が玲紀を待ちぼうけしていた場所まで一気に駆け抜ける。
一人で歩いた時の沢山の不安などはなく、安心が風と共に僕の体を通り過ぎた。

「・・・ごめんな、陸斗。変なトコ見られちゃった」
舌を出して笑うと、大きく息を吐きながら寝転がった。
僕は玲紀の横に立ち、少し迷いながらもその横に体育座りをした。
「それと、昨日言ったことも・・・ごめん」
今さっきまで笑っていた玲紀の声と違い、真剣な声色だった。
あえて顔は見なかったが、きっと表情だって同じような色を醸し出しているだろう。

胸が苦しくなって、自分の両膝に顔を埋めた。
「・・・何かあった？」
精一杯言えた言葉が、その一言だった。
玲紀は起き上がり、僕の横であぐらをかく。
神妙な眼差しは、川の流れる暗闇に向けられて何が映っているのかは分からない。
「うちの母さん、見た通り厳しいからさ・・・」
玲紀の口から母親の話が出ると、なぜか違和感が生まれた。
今まで二人とも無意識の内に避けていた話題である。
「マチの学校の友達にも嫌われてて、俺までみんな嫌うんだ」
俯いた玲紀は、淋しそうな口調で話した。
「みんな、つい最近までは一緒に話したり遊んだりしてたのに・・・
さっき、母さんが陸斗にも言ったみたいなことをみんなにも言った途端・・・」
握り締めた拳が震えていた。
視界の片隅でそれを捉えると、僕まで震え出しそうな錯覚に陥る。
やりきれない気持ちで、僕は抱えた両足をギリギリと締め付けた。
何も出来ない僕が悔しくて、そして悲しかった。
「母さんが俺の友達を奪ったんだ・・・！」
真正面に浮かんだ半月が、星よりも強い光で僕達を照らす。
ポツリポツリと玲紀の拳に水滴が落ちる。

「玲紀、僕は友達じゃないの？」
彼が俯いたままだった顔を上げ、涙で濡らした瞳を僕に向ける。
男の子の泣き顔なんて見たの、いつぶりだろうか。
「・・・変わるなって言ったよね。僕は、変わらないよ」
彼の瞳を見ながら話すことに照れが生じ、視線を反らしてからまた口を開く。
「例え、君のお母さんにあんなこと言われてもさ」
少し自嘲気味に、僕は言い放った。

涙を拭い、玲紀は僕と同じ体育座りをしてから小声で呟いた。
「・・・ありがとう」
その瞬間に見せた玲紀の笑顔は、何の屈託もない笑顔だった。

ただ他愛もないことを笑いながら、僕達は半月が頭上に昇るまで談笑していた。
一年に一度しか会えないという現実を忘れようとしているようにも思えた。
昨日のように突風が吹きつけると、今までの笑い声が嘘のように止み、沈黙が辺りを囲む。
耳が痛くなるほど静かで、遠くからかすかに秋虫の鳴く声が聞こえた。

「夜って嫌だな・・・」

唐突に玲紀が言った。
僕は月を見上げたまま、彼の声を聞いていた。
「どうして？」
半月の上に、兎の足の部分が浮かんで見える。
涼しい風が通り過ぎては、耳元で囁くようにして音を立てた。
玲紀もまた、囁くといっていいほどの小声で言う。
「朝が来るからだよ」
いい加減、首が痛くなってきたので視線を玲紀に移しながら口を開いた。
「朝は嫌いな・・・」

「お前が横にいると、淋しくなるんだ」

僕の言葉を遮って言い放つ。
思わず、見なかったことにしてまた月を仰ぎ見た。

玲紀と同じように、

一筋の涙が僕の頬を伝った。

## 5

夜に秋の虫が鳴いていても、まだまだ昼間は暑い。
棘を持ったような日差しが肌を焼き、汗は絶え間なく噴出す。
時折吹く風に喜びながら、玲紀を待っていた。

「ごめん、陸斗！」
後方から声がし、合わせて走ってくる足音も聞こえた。
「母さんにつかまっちゃって・・・」
「あ、怒られた？」
太陽の下で見る玲紀は、これが初めてと言っても過言ではない。
こんなに色が白いとは気付きもしなかった。
「ううん、母さんも自分が悪いって分かってたんだよ」
すっきりとした爽やかな笑顔で彼はあっさり言い放つ。
足枷が取れたような、重荷がなくなったかのような、そんな印象を受ける。
「・・・もう行くんでしょ？」
僕が訪ねると、玲紀は静かに頷いた。
去年より、一昨年より、どこか淋しさを含んだ空気が二人を包む。
いつもなら出発する日の昼に会うことなんてない。
暗黙の了解で、まるでひと夏の思い出のようにして忘れるのだ。
「また、来年だね」
「・・・うん」
玲紀は太陽を見上げる。
彼は目を細め、何かを探すようにそのまま見つめた。
うっすらと汗が光って、まるで夜の冷気とは違う人間に思える。
実際、一昨日までの玲紀とは別人だ。
事実よりも、彼の顔がそれを物語っている。

「玲紀なら友達の一人や二人、すぐ出来るよ」
額の汗を拭いながら、僕は地面に腰を下ろした。
暑さに負けたのか、これ以上玲紀を見ていたくなかったのかは分からない。
「当たり前だろ、俺はお前の友達だぜ」
しゃがみこんだ僕を見下ろすようにして、玲紀は笑う。
逆光でその顔は見えなかったが、逆にそれで良かった。
僕の中に不安があったから、うまく笑える気がしなかった。

「さぁ、もう行くか」
玲紀は小さく背伸びをすると、僕の様子を窺っている。
まるで一昨日までの玲紀が乗り移ったかのように、僕は焦っていた。
「・・・陸斗？」

毎年毎年、夏に出逢っては別れ、それぞれの生活をしてきた。
その中で、どうして今まで一度も思わなかったのだろう。
そして、どうしてそれが今になって生じたのだろう。

マチに帰った玲紀が、僕を忘れて友達を作ってしまいそうで、怖かった。

「・・・玲紀は、変わんない？」
力強い日差しに、僕の力は吸い取られてしまったのかもしれない。
それくらい弱い声で呟いた。
「変わんないよ。お前だって変わんないでいてくれるんだろ？」
彼の優しい口調に、安堵感が芽生える。

小さく頷くと、頭の上に彼の手が乗った。
「来年、この場所に家でも建ちそうだったら・・・」
玲紀の言葉を奪うようにして、強引に僕が続けた。
「その時は必死で止めるよ」
逆光で見えない玲紀の顔を見上げて微笑む。
彼もそれに呼応して微笑んだ。

「じゃあな」
二回ほど頭を叩くと、僕の横から玲紀はいなくなった。
あえて振り返らない。
振り返ればそれだけ、来年会うまでの時間が先延ばしになるような気がした。
暑さを我慢して、そのまま寝転がる。

太陽を中心にした広い空の端に、薄い色の月の姿があった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2863i/

---

一色

2010年10月28日07時50分発行